都市環境に対する住民意識の一考察

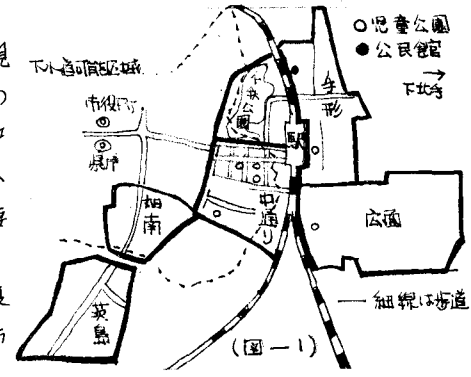
秋田大学　正会員　清水若志郎
○　学生員　吉田和博

[1] はじめに

都市問題が叫ばれつづけているが，都市はその様な声を無視し，巨大化し、大気汚染，交通難，コミニティーの欠如，緑の減少と都市公害を増大している。高度成長による産業，経済中心の都市から，人間が生き生きと活動し，生活していく都市へと意識を変え，そのための都市環境の整備を早急に行なう必要がある。

具体的には，都市環境に対する住民意識を把握し，都市回復への手がかりをつかむ事である。そこで対象地域として秋田市をとり，市内4小学校区域の各世帯へ，生徒を通じてアンケートを配布した。この4小学校は，都心部農村部，工業地帯，公園地帯に選定した。なお，アンケート配布は，区域の人口を考えて，421枚配布し387枚の回収を得，回収率は89%であった。

解析には，(表－1)(図－1)に示す様に，土地利用率，位置などを考えて「中心部」「周辺部」「農村部」の三地域に分類した。



(図－1)

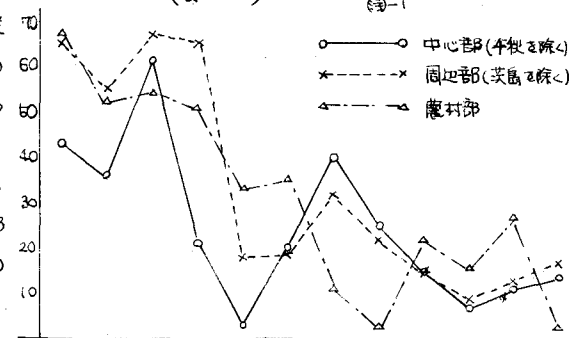
	中心			周辺			農村
地名	中通り	畑南	千秋	手形	広面	英島	下北手
人口密度	81.4	95.8	70.9	38.6	72.6	27.0	2.7
対象数	29	54	30	88	42	60	63
農業施設(%)	0	10	0	30	45	19	96
住宅施設	39	47	54	58	49	41	3
商業施設	45	28	9	5	1	2	0.03
事務所施設	2	0	2	1	0	1	0
工場施設	1	2	0	0	0	35	0
文教施設	4	7	35	16	0	2	0.02
その他	9	6	0	0	5	0	0.30
発生交通量/面積	314	84	83	45	36	28	0.02

(表－1)　土地利用率は%で示す

[2] 都市環境に対する住民の意識

都市環境に対する不満を12項目について聞いた所(図－2)の結果となった。これで見ると「道路の整備」「子供達の遊び場」「歩行者道」「上下水道」に高い不満を示してる。しかし，それらがほぼ整っている「中心部」では，他と比べて大部低くなっている。「子供達の遊び場」は，どの地域でも不満が多い。([1]参照)「下水道」への不満が高いのは，中心部以外の他の区域では，下水処理可能区域になっていないためと考えられ，整備の充実が必要である。

「中心部」「周辺部」と「農村部」を比べると，前者は，「公害」「緑自然」への不満が高いのに対し，後者では，「図書館」への不満が高い。このことから，しだいに消滅しつつある都心の「緑，自然」をどの様にして守り，確保していくのか。又，文教施設が希薄化している「農村部」に，どの様に，諸施



	道路の整備	歩行者道路	子供の遊び場	上下水道	都心への交通	通勤の交通	公害	緑・自然	公園	公民館	図書館	隣人関係
英島	60	52	37	48	18	28	82	27	15	12	7	7
千秋	17	53	57	27	0	0	30	0	0	7	7	7

(図－2)

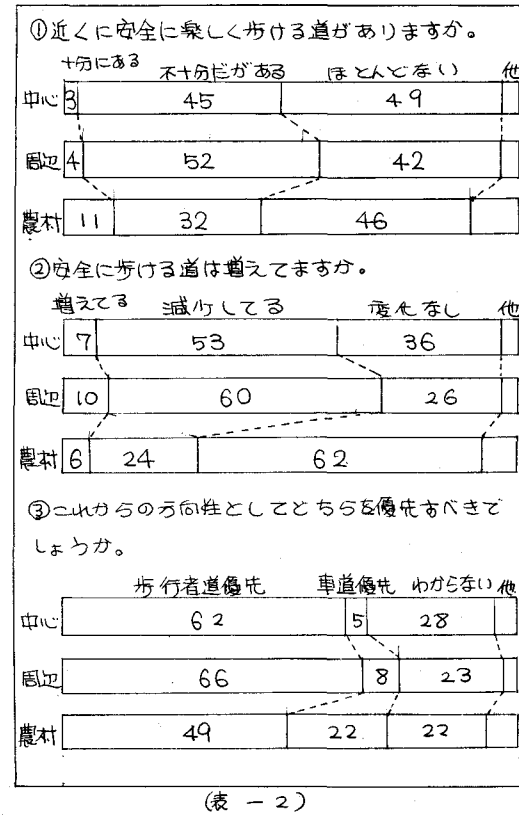
設を配置していくのかを考えねばならないだろう。

グラフの下に表わした英島地区の意識では、工場地帯を有するために、「公害」への不満が82％と高い値を示している。「都心，通勤の交通」への不満は、中心から離れるほど高くなっている。都市の巨大化の中で，公共交通機関を中心とした交通を考えていく必要がある。その他特に目立つ点として，「隣人関係」が農村部に比べて、「周辺中心部」で不満が高い事である。（図参照）

[3] 歩行者道について

車の三悪「公害」「事故」「渋滞」，現象的三悪「人間の孤立化」「体力の退化」「歩行者への差別思想」以上6項目に示されるように，現代都市においては，車の問題をさける事ができなくなってきた。

（表－2）にみられるように，歩行者道に対する意識は3地域に，ほとんど相違はみられず，歩行者道の不十分性を指摘している。又，同時に聞いた「あなたは，歩く時，車に危険を感じますか」の問に対し，約90％の人が感じると答えている。表-2の②より，発生交通量の少ない農村に「変化なし」が多く，交通量の増大している「中心周辺部」では「減少してる」と答えてる人が多い。これは，交通量の増大が，歩行者の安全を脅かしているからだろう。「増えてる」と答えた人は，歩道の新設によるものと考えられる。この様に歩行者が車に脅やかされてる中で，表-2の③に示す通り，今後の方向性として歩行者道の優先をあげてる人が圧倒的に多い。農村では車道の要求が，他の区域と比べて高いのが目立つ。又，車の所有者でも，5：1の割合で，歩行者道の優先をあげていた。ある程度歩道の整っている「中心部」でも不十分性を示してる事から，歩道の更なる充実とともに，歩行者専用道路の設置が望まれる。

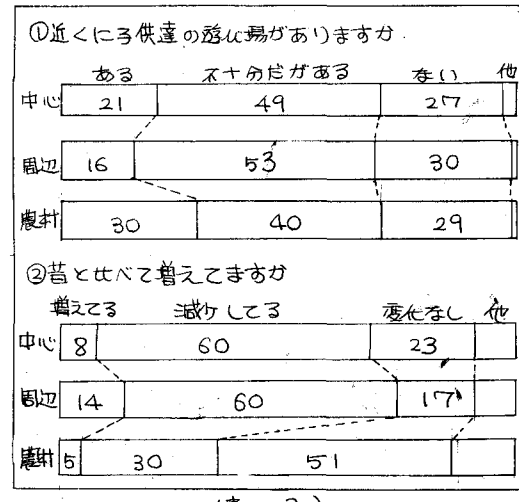


（表－2）

[4] 子供達の遊び場

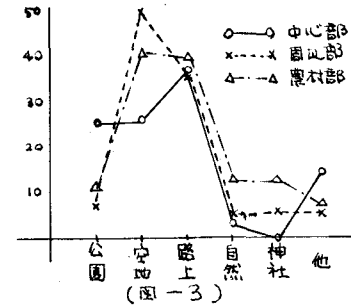
（表－3）の①，②に示す様に，子供達の自由な遊び場が不十分であり，また減少してる事がわかる。子供の遊びは，個性の発掘，創造性をのばすのに大切である。その遊び場が不十分である事は，これからの社会に多大な影響を与えるだろう。

（図－3）より，子供の遊び場の中心が，路上と空地になっている事がわかる。しかし，都心部になるに従い，公園の利用度が高くなり，児童公園が三ヵ所ある「中通り」では，50％の利用がある。（表－3）の②に示す様に，農村で「変化なし」が多く，中心では「減少」が多いのは



（表－3）

路上が，車によって奪われた事と，都心の土地高度利用で，空地が減少したためと考えられる。[2]と関係してくるが，子供の遊び場として，道路の利用度が高い。子供達にとって，自宅付近の路上が，日常的に近くの仲間と安心して遊べる場所であり，社会学習の場でもあるからだろう。つまり子供達にとって，路上が最高の遊び場と言える。



（図－3）

①近くに，町内の人々が顔を合わせる様な催し物と施設がありますか。

	中心	周辺	農村
両方ある	4	7	3
催し物だけ	3	12	16
施設だけ	15	19	24
両方ない	77	60	57

②秋田市の中心はどこだと思いますか。

	中心	周辺	農村
県庁，市役所	33	30	38
商店街	54	59	57
千秋公園	5	5	5
その他	8	6	0

③あなたが親しく感じられる範囲は？

	中心	周辺	農村
小学区内の人々	13	12	8
町内の人々	15	21	29
となり近所の人々	30	35	40
職場の人々	42	41	30
その他			

（表－4）

〔5〕秋田市のコミニティーについて

（表－4）に示すように，親しく感じられるのに「職場の人」と答えた人が多い。中心に近づくほど「職場の人」が増えてるのが注目される。逆に言えば，中心になるほど地域コミニティーが欠如していくことになる。この調査は，世帯主を対象としたので，主婦等を対象にすれば変化するだろう。世帯主は，週日を勤め先ですごし，更に，車で通勤してる人は，家～車～会社と，地域との関係を絶ってしまっている。この事から，会社員としての自覚が，市民としての自覚を失なわせ，横の関係より，縦の関係が強まってる事がわかる。この様な原因として，表4の①に示すように，地域の人々が顔を合わせる様な催し物と施設が不足してる事，生活の場として道路が車に奪われ，身近に話し合える場所がない事などがあげられる。

秋田市の中心では，商業地域をあげたのが多かった。このため，秋田市民のコミニティー形成のため，アゴラの様な広場や，旭川市の様な買物道路をつくる事が必要だろう。

〔6〕まとめ

都市は，その時の文明，技術，思想の総表現として出てくるものである。都市公害の増加を防ぐには，新しい文明，技術，思想をつくっていく必要がある。

この都市環境に対する住民意識のアンケートが示す様に，道路が車に専有されてる事が，大きな問題化してる。歩行者の安全が脅かされ，子供達の自由な遊び場やコミニティーの空間が失なわれた事などがそうである。ルドフスキーは，「悲しかにもわれわれは，街路が砂漠ではなくむしろオアシスになる事に気が付いていない」と言っている。[2] 現在の道路が車のためにあるという考え方ではなく，道路を生活空間の場として考え直す必要に迫られている。具体的には，ある特定区域の，車の乗り入れを禁止したり，公共交通機関を充実させ，不要な車をなくす事などがあげられる。又，車道には，必ず歩道を設ける事も必要だろう。

秋田市の限定した区域のアンケートであったが多くの問題点を指摘できたと思う。今後，各都市で，全階層を対象としたアンケートで，それぞれの問題を浮きぼりにし，住民に密着した住民による都市計画を行なっていく事が必要だろう。

《参考文献》

○道路交通情勢調査報告書（秋田都市圏）46年度10月 ――注①

○人間のための街路　バーナード・ルドフスキー ――注②